



夜、でっかい犬が笑う

丸山健二

文春文庫



文春文庫

夜、でっかい犬が笑う

定価はカバーに
表示してあります

1991年3月10日 第1刷

著 者 丸 山 健 二

発行者 豊 田 健 次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3 — 23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-728106-6

文 春 文 庫

夜、でっかい犬が笑う

丸山 健二



夜、
でっかい犬が笑う・目次

1 わが友としての犬 9

ジーガー・シェパード

2 穏やかな犬の眼ざし 29

ボルドー・マスチーフ 柴犬

3 来る犬、去る犬 49

アフガン・ハウンド

4 すさまじい食欲、水泳、糞

67

セント・バーナード

5 UFOを発見した犬 83

チャウチャウ

6 人を咬んだ犬の運命は……

ドーベルマン

99

7 大甞をかいて眠った犬 115

アイリッシュ・ウルフ・ハウンド

8 理想の犬を求めて 131

ジーガー・シェパード

9 バーフェクトの犬になったとき……

土佐闘犬

147

10 犬を埋める 163

ダルメシアン

11 陽気にはしゃぐ犬 179

ラブラドル・リトリバー

12 風のように旅する人と犬 195

デインゴ

插画
津田 櫓冬

夜、
でっかい犬が笑う

1

わが友としての犬

二十四歳になったとき、私は突然犬を飼うことに決めた。それもなるべくでかいのが欲しい
と思い、さほど迷うこともなく、シェパード犬という答を出した。日本シェパードより図体が
ひとまわり大きいジーガー・シェパードに眼をつけた。犬の本に載っている写真を見せてやる
と「これがいいわ」と妻も言った。しかし、犬を飼いたがる私たちの動機はそれぞれ異なっ
ていた。子どもの頃から動物好きだった妻はペットとして犬を求め、私の場合にはボディガード
と友人のふたつの意味があった。

とはいえ、頼りになる護身犬が必要な理由などまったくなかった。書いた小説の内容が政治
的過激派の逆鱗げきりんに触れるようなことはないはずだったし、また、当時の私はとても貧しく、盗

まれて困るような財産を持っていなかったから番犬として飼うのもおかしい話だった。友人の代りを求める気持ちのほうが強かったのだろう。あの頃の私は、小説を書くというややこしい仕事を始めたばかりで、そのうえ信州の山村へ引っ越したばかりだったので、わけのわからぬ不安にすっぱり包みこまれていた。友人はおろか知人さえもない土地で生きてゆくには、せめて犬くらいは傍らに置いておきたかったのだろう。心の支えとなる相手が欲しかったのだらう。

それにしてはいささか無茶な買い物だった。わずか五、六十万円の年収のなかから五万円を犬のために出すのは、とてつもなく贅沢なことだった。だが、私たちはためらわなかった。一頭の仔犬を買うために頑張つて原稿を書こうと意を決したものだ。その仔犬をどこから手に入れるかについては見当がついていた。あの悪名高きT畜犬だった。しかし、T畜犬のあくどい商法が社会問題にまで発展したのは一年後のことで、当時はまだ日の出の勢いで伸びている堂々たる企業だった。

T畜犬からパンフレットを取り寄せたときには、すでに犬の名を考えていた。《ゾロ》。この名はもちろんあの《怪傑ゾロ》から取ったものだ。名を決め、村の大工さんに頼んで立派な犬舎を作ってもらつて、私たちは仔犬が届くのを待った。送金はすんでいた。長いこと待たされた。しびれを切らして東京へ電話をかけてみたが、そのたびにいなされてしまい、一向に埒が

明かなかった。「そのうちきつと」とか、「あと一ヵ月お待ちください」とか、「生き物が相手ですから予定通りには運ばないですよ」とか、そんなことばかり言って逃げていた。

むかつ腹を立てた私はとうとう上京し、郊外にあるT畜犬に乗りこんだ。ひどいところだった。パンフレットのイメージとはほど遠い、犬の 아우슈ビッツのような空間だった。ありとあらゆる種類の仔犬が狭いゲージにごちゃまぜに押しこめられており、バラックの建物のなかにある事務所には、人相のわるい、押し売り風の男たちがひしめいていた。口先だけで、犬のことなど本当は何も知らないかれらは、「ワンちゃんが、ワンちゃんが」などと気味のわるい言葉づかいをしながら、お人好しの客を相手に電話をかけていた。かつて商社で働いていたことのある私には、T畜犬がどんな会社であるのかそのとき理解できた。上から下までごろつきで成り立っている集団に違いなかった。甘い顔をしていると何をされるかわからないと思い、まともな態度で接するのはやめにした。

電話でたびたび話をした担当のセールスマンを外へ連れ出して、私はいきなり凄^{すげ}んだ。

「金を返すか犬をよこすか、この場で返事をしろ」と言い、返答次第ではただではすまさないと迫った。彼はそれでも弁解がましいことをくどくどと言いい、しかし結局は一週間以内に仔犬を送ると約束した。私は信じていなかった。言い逃れに違いはないと思っていた。ところが家へ帰ってしばらくすると、T畜犬から連絡があった。飯田市の駅へ送ったから受け取りに行くよ

うにとの指示があった。私たちは喜んだ。その晩は眠れなかった。冬の終りだった。

翌朝、妻はバスに乗って飯田市へ出かけて行った。左手に新聞紙を敷きつめた買物かごをきげて、ゾロをそれに入れて運んでくるつもりだったのだ。ところが、午後になって妻はタクシ―で帰ってきた。「とっても大きいのよ」と彼女は言い、「買物かごになんか入るわけがないわ」とぼやいた。たしかにその通りだった。生後二カ月のジーガー・シェパードの仔犬は、想像をはるかに越える大きさだった。それは木の箱に入っていて、タクシ―の運転手に手伝ってもらわなければ運ぶことができなかった。

私は箱を開けてゾロを出してやった。ゾロは初めて見る人間におじ気づいていたが、ほどなく近寄ってきて、牛乳や餌^{えさ}を与えるとすっかりなついた。肢^{あし}の太い、顔付きのいい立派なシェパードだった。よく食べ、よく遊び、よく眠った。だから私たちはそのまま順調に育ってくれろと信じていた。犬というのは餌さえたっぷり与えていれば自然に大きくなるものと思ひ、病気のことなどまったく考えていなかった。私たちは無知な飼い主だった。

十日ほど経つと、ゾロの様子が急におかしくなった。食欲が衰え、下痢が始まり、鼻汁を出すようになった。「風邪^{かぜ}をひいたんだ」と私は言った。「家へあげてやりましょう」と妻が言った。しかし、私はその意見には反対した。過保護に育てたのではろくな犬にはならないと言ひ、たかが風邪くらいで家へあげることはないと言った。また、人間と犬との境をとっぱらってし

まうような飼いが、犬にとって本当の幸福かどうかはわからないとも言った。そして、ゾロを仔犬には大き過ぎる犬舎のなかへ閉じこめておいた。

病状はじりじりと悪化へ向っていた。そこへ更にわるいことが重なった。その村を出て行かなければならなくなったのだ。

私が借りていたのは村営住宅で、家賃は月千五百円程度。私が引越してくるまで借り手がつかず、長いことほったらかしにされていて、ひどいありさまだったのだ。襖^{ふすま}を貼^はり替え、庭の雑草を退治して、どうにか住めるようになったかと思ったら、ある日役場から男がやってきて、彼はこんなことを言い出した。「春から中学校の先生に住んでもらうことになったので、明け渡してもらいたい」と。小説家なんぞよりも教師のほうがはるかに村の役に立つと考えた私は、「はい、そうします」とあっさり承知した。あのとき、もし私が居住権を振りまわしてごねたら、どんなことになっていただろうか。今でもときどきそんな想像をして苦笑することがある。「おい、また引越しだぞ」と私は言った。「まだ半年しか住んでないわよ」と妻は言った。父の仕事の関係で引越しばかりして育った私には、知らない土地へ流れて行くことなどさほど大げさな問題ではなかったが、妻にはいちいちショックだったようだ。「今度はどこへ行くの？」と妻は訊^きき、私は「借家^かなんてどこにだってあるさ」と答えた。しかし、あまり突然のことだったので、次の家を捜す時間がなく、やむなく私たちは長野市の実家へころがり

こんだ。引越しの疲れと環境の変化で、ゾロはますます衰弱し、しまいにはリングシカ食べられなくなった。それでも長野市へきていいことがひとつあった。獣医にきてもらえることだった。ところが、この獣医ときたらとても下品な男で、昼間から酒を呑んで酔っぱらっていることが多かった。ただ獣医としての眼はたしかだった。ゾロを見た途端、彼はこう言った。「あんたたちの飼い方がわるいんじゃないやねえよ。ジステンパーにかかっている犬をつかまされたのさ」と。

風邪ではなく、ジステンパーだという。ジステンパーのために肺炎になっているのだという。送られてきたときに元気だったのは、カンフル注射でもされていたからではないか、と獣医は言った。「やるだけはやってみるが、まず助からないよ」とも言った。ゾロの咳せきこみは日増しにひどくなり、しまいには歩けなくなり、うずくまっただけだった。それでも妻が買物に出かけようとすると起きあがり、門のところまでよたよたと歩いて行き、姿が見えなくなるまで立っていた。

私はT畜犬に電話をかけた。「おまえのところでは病気の仔犬を売りつけるのか」と文句を言ってやった。だが、相手は絶対にジステンパーを認めようとしなかった。「そんな病気にかかっている仔犬はうちには一頭もいませんよ」と言い張った。それでも尚なほはげしく詰め寄ると、「もし死んだら、契約通り代りの仔犬を無料で差しあげます」と言った。私は後悔した。こん